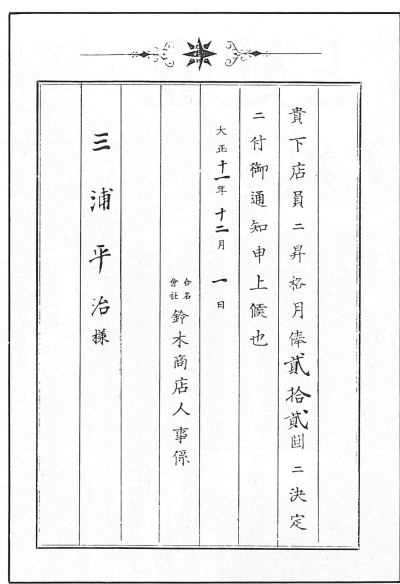


### 三浦平治

大正六年三月郷里兵庫県揖保郡新宮町の香島尋常高等小学校を卒業すく神戸市栄町二丁目の竹本謙吉商店へ入店した。竹本謙吉商店は海産物と薬種を扱う問屋で、住込み月給五拾銭である。私はそれ迄余り自覚しなかったが臭覚に弱い事が判り、この仕事に不適格である事を悟り転職を決意した。

当時神戸では鈴木商店と湯浅貿易が並び栄へ羨望の的であった。私は高梨保二さんにお願ひして履歴書を提出し、大正六年十月四日



附で採用され受付係勤務を命ぜられた。(当時お店は川崎町) 受付での私の任務は掃除、お茶汲み、来客の案内、信書の配布で、大手の御本家への使いも私の受持ちであった。

本家の勝手口から這入り用事が終るとお家さんから菓子や紙に包んで頂いた。最初二三回は「ぼんさん」と言われたが其の後名前を尋ねられ「三浦」と呼ばれる様になった。

大手へ使ひに行った日、天気が悪くなりそうなので御主人(鈴木岩治郎様)にレインコートと洋傘を持って行く様渡され、大手停留所に着いた頃ポツポツ雨が降り出した。電車を待っていると下り電車で御主人が着かれた。君は洋

傘をさして行き給えと洋傘を貸して下さった、洋傘をさしたのは生れて之が初めてである。

又毎週土曜日に中山手四丁目の順生院(院長渡辺泰氏)から御寮人さん(鈴木免三夫人)のお薬を塩屋の浜の本宅へ届けるのも私の仕事の一つであった。

受付係主任は、松本三平氏  
次席は、公文榎吾氏

松本さんは小柄で腰低く温厚で皆から親まれる方である。公文さんは高知出身五尺七寸十八貫位大きな眼鏡をかけ、いつも縞の着物に仙台平の袴、釣り合わぬのはぞうり履坂本竜馬を思わせる大柄な人であった。私はこの公文さんに大変可愛がられた。

或時御主人(岩治郎様)が店へ来られ、二階への階段を上りかけられた処を公文さんが御主人の上衣を捉えて「受付に無断で通られては困ります」とやっているの、私がとんで行き御主人である旨申しました処、公文さんは大いに驚き三号室を通じお詫びされたことがあった。御主人は余り店へは来られなかった。

寄宿舎  
寄宿舎は最初須磨月見山海岸の

水泳部の二階と決った。そこには教育部長高橋行次先生、冶金部松原弥三郎主任と、ぼんさんの高知県出身山本寿之助氏、私の四名であった。水泳部閉鎖の為約二週間で須磨八本松の寮へ移ることになった。

毎朝一番電車で(一番電車には毎朝ぼんさん四、五人位)兵庫駅から宇治川の店迄かけ足で競争したもんです。

受付の掃除を済ませ食堂で朝食をとる、この時分になるとえらい人達も出勤されるので食堂も賑い主任もぼんさんも同じ席で同じものを食べる、全く平等である。

三食共店の食堂だったが土曜日の夕食は寮で焼きのたべ放題であった。腹いっぱい食べてすぐの海岸へ出て砂浜を歩いた記憶を懐かしい。少しの邪気もなく只店の為めに、少しの時間も惜んで勉強した。受付のぼんさんは二三ヶ月で転任した。転任先を神戸製鋼所と浪華倉庫の何れかを選ぶ様内示があった。浪華倉庫は安田倉庫を買収した直後で公文さんも推薦されたので浪華倉庫への転任が決定し、大正六年十二月十三日附の辞令を頂きすぐ赴任した。

昭和六・二・一〇迄

- 株式会社浪華倉庫
- 八・一・一・三〇迄 浪華倉庫株式会社
- 一九・四・三〇迄 浪華倉庫株式会社
- 二〇・九・三〇迄 浪華倉庫株式会社
- 神戸製鋼所
- 其の後自営

### 天晴れお遍路さん 四国路をゆく

お世辞にも信心深い男といわれた事のない私が、七十六才にして始めて四国八十八ヶ所巡礼の旅に出たのだから「へ一本当かいナ」と疑われるのも無理はない。私も別に後生樂を願ってとか極樂行の予約をとかそんな大それた考へは更々なく只何んとなしに罪障消滅、信力倍増を念じ南無大師遍照金剛と唱えながらの一人旅も万更ではあるまいとフトそんな気がした迄のことで矢張り年のせいかも知れない。只団体とかグループに参加してバスや車での巡拝ならともかく自分一人でテク／＼歩いての巡

つた人達

- 青木一葉 浪華倉庫支配人、大日本塩業社長、桜麦酒社長
  - 山中織之助 浪華倉庫經理課長
  - 島崎直幹 浪華倉庫庶務課長、横浜支店長
  - 黒田繁治 浪華倉庫小樽支店長
- 之は鈴木商店入社当時の印象でつきせぬ御縁の深かさを感謝しつづけていく私の姿である。

### 竹下 富士松

拝だったから楽じゃなかった。名古屋から洗面具と着替一枚もって徳島に渡り一番札所の靈山寺で菅笠、白装束、納経帳にずた袋、金剛杖やその他一切と、のえて天晴れお遍路さんに早変わりした私は一番札所から一步を踏みだした。霊場間の遠距離とか時間的にやむをえない場合だけは自動車かバスを利用したが、その他は一切乗物にたよらずすべて我が健脚をたよりに徒歩の一人旅、いや一人じゃなかった、お大師さんとの同行二人でこれ程心丈夫な相棒もなく、何んの不安も孤独感もなく結構気楽

な巡礼の旅が続けられた。

地図をたよりに田舎道を通り密柑島を過ぎ谷川を渡り急坂を登る。一人の老巡礼の姿を敬けんな目差しで見送る老婆、問えば細々と親切に道を教えるお百姓さん、呼びとめられてお賽銭と渡されるその手の温かさ、傍に車を止めて便乗を促がす親子連れ、こうした人々の温かさや厚意の毎日が楽しく続いた。民宿や遍路宿の一碗の味噌汁にも心がこもっている。私はこの巡礼で人間の善意がいかに美しいものか身にしみ分った。

標高千何米徒歩十八キロとか海抜二千何米徒歩三時間半なんて立札をみるとホーツと吐息もでるが又それだけにファイトも湧く。山頂に在わすお寺への険しい旧山道を草の根わけてよじ登る厳しき心細さ、それでもお大師さんと二人連れと気をとり直して頑張り通した昔の遍路さんの難行苦行がよく分る。今は新しい道が開けバスや車でスイ／＼と登る人達にはとてもとても分るまい。阿波から土佐を通って伊予へそして讃岐と散在している八十八ヶ所を巡礼している間には、思いがけない困難にも幾度か遭遇したが、その都度不

思議な救いの手に助けられた。とても筆舌では現わし難い事実である。二十日目の早朝結願所の八十八番徳島と香川の県境の山奥に在す大窪寺で納経帳にご朱印を頂いた時、私は、何んともい、ようのない感激と歓喜が身体中一杯に溢れる思いがした。

道連れの菅笠と金剛杖を奉納し、目的を果した悦びに気も晴ればれと勇氣百倍躍るような足取りで下山する私の後姿は、ほの／＼と美しくみえたのかも知れない。後方からきたマイカーに拾われて高松行電車乗場迄長い道中を送り届けられ予定より四時間以上も早く高松市に入った。

思えば毎日三十キロ以上は歩いている。しかも殆んど山道か田舎道で只モウ何んにも思わず考えず無心に歩いた、この無心こそ、純粹で清浄で無慾であった。無心、それは即仏心に通じるのではあるまいか。私はフトそんな思いがして今度の巡礼は決して無駄ではなかったと思っている。何れにしても後味がよく何んともなく爽やかな余韻が残る。機会があればモウ一度出かけた。何かそれは分らない只何んともなくそんな気がする。